

羊 齒

—平成元年記念—

第28號

新ハイキングクラブ・横浜支部

と挨拶	文藝員	北村 登	2
1 山の動物道	遊 実	朝文川 清治	
2 東北の山麓		沢野 正明	
しだ			
第 2 8 号			
平成元年(1989)			
1 始めて、中野町			1
2 山半余計十三の「支用制」			2
3 秋の山歩き			2
4 秋の山歩き			2
5 秋の山歩き			2
6 秋の山歩き			2
7 秋の山歩き			2
8 秋の山歩き			2
9 やつと富士山へ来た			2
10 台風と山			3
1 秋の山歩き			3
2 山との出会い			3
3 青春っていいなあ			3
4 短歌「山」			3
5 瀬戸内四島の探検会と登山			4
6 ある一期一会			4

新ハイキングクラブ・横浜支部

あとがき 46
紙 鶴子) 早川

ご挨拶

私達には「山」と云う、共通の世界が有ることは素晴らしい事です、自然と親しみ、山野の花を愛し、そしてお互いを優しく見つめ合える事は、何と素晴らしい事でしょうか！！

これは山に登る人だけが分かる世界でしょう。

この度、支部報「しなご」第28号が発刊出来ました事は、私としても望外の喜びであり、原稿を出して下さいの方々、校正、編集、製本等を担当して下さいの方々、又、その他支部の皆様のご協力が有ったからこそ、実現出来ました事でここに紙面をお借りして、心より御礼申し上げます。

最後になりましたが、「新ハイ横浜支部」の三十有余年の歴史は貴重なもので、現会員の方々は、もちろんの事、先輩諸兄姉の、御努力の賜物だと思います。

これからも「新ハイキング横浜支部」は、[不滅]です。それには全員の、愛かしこ心、が必要であると思います。

新ハイキング横浜支部

支部長 北村 襄

「しだ」 第28号 目次

	支部長	北村	巖	(頁)
				2
1 山の動物達		祖父川	清治	4
2 東北の山雑感		沢野	正明	6
3 出合い		若林	寿子	7
4 北アルプス雑感		石原	弘之	8
5 日本横断		太田	繁信	9
6 温泉五態		小池	広治	10
7 山との出合い		北村	巖	11
8 危なっかしい山登り		横山	勝利	13
9 山との出合い		中島	裕	15
10 石割山から忍野八海へ		岡野	達	16
11 初めての単独山行		橋本	和恵	18
12 山に魅せられて		太田	俊子	20
13 飲水の思い出		芹沢	隆仙	22
14 婦夫で山行雑感		長谷川	美江	24
15 定年と山と新ハイの仲間達		御園	培博	25
16 今年の夏山		小倉	靖子	26
17 随想 休日は近くで自然浴		香川	照夫	27
18 或る出合いと別れ		飯島	和子	28
19 やっと富士山に登った		山田	進	29
20 台風17号樺島脱出の記		星野	喜美子	31
21 奥秩父主脈の思い出		茂木	武	33
2.2 山との出合い		高橋	巖	35
23 青春っていいなあ—		鎌田	善子	36
24 短歌 “山”		古谷	芳子	39
25 瀬戸内因島の博覧会と低山に登る		山本	一夫	40
26 ある一期一会		熊谷	松治	42
会員名簿				43
あとがき				46
(表紙題字)		早川	益雄	

山の動物達

祖父川 精治

山を歩いていて、動物達に出会うとは実に幸運で、楽しい山の思い出が更に倍となってよみがえってくる。

以前は、こんなにも動物達に出会った記憶はないとおもう。ダムや林道の大規模な自然破壊、植林のための雑木林の伐採、その後、苗木の保護として、全山を柵で囲ってしまう。彼らの安心して、住む地域がどんどん狭められている。山を歩いて、動物達に出会うことは、ほんとは悲しむべきことなのだ。山の動物達にとって、最も恐ろしい相手は人間なのだから。

私の好きな丹沢周辺の例で、幾つかあげてみると次のとおりである。

- 元年 4月 大山不動尻近くで鹿と出会う。
- 63年 9月 大山表登山道で鹿と出会う。
- 63年 7月 鐘ヶ岳登山道でマムシと、こんな大きなのは始めて、鐘ヶ岳の主かと思う。
- 63年 5月 経ヶ岳頂上付近で鹿と出会う。
- 61年 2月 鐘ヶ岳登山道で狐と出会う。
- 60年10月 旧土山峠道で狐と出会う。
- 59年12月 谷太郎林道で猿の群れと出会う。
- 59年 9月 鐘ヶ岳北尾根で鹿と出会う。
- 59年 2月 ナベアラシでカモシカと出会う。
- 58年 3月 物見峠周辺でリスと出会う。
- 57年 4月 大山薬師尾根でムジナ？と出会う。
- 57年 7月 蛭ヶ岳頂上で鹿と出会う。
- 54年 5月 同角山稜でカモシカと出会う。

北アルプス中尾峠から、岐阜県側の蒲田川へ下り、新穂高温泉の双六荘へ泊まる。宿のホールのガラスケースの中にオオカミの剥製が飾ってある。昭和47年2月、笠谷にて死体で発見したと説明がある。キタキツネやホンドキツネには、幾度も出会っているので自信がある。もしこれが本物だとしたら大変なことになる。確か、80年前の明治中頃に、関西の屋根、大台ヶ原山中で捕らえられたのが、最後の一頭のオオカミだといわれているからだ。

計り知れない自然界のこと、我が国のオオカミ史が大きく変わるだろう。このことを新ハイ誌上に書いたら、我が家へ問い合わせの電話が再三あって、その対応にはいささか参った。(63・8)

恵那山への林道を歩いていた。大きく曲がった、すぐ先になんと二頭のカモシカ。

沢へ水を呑みに下ってきたのだろう。一頭は素早く逃げたのに、とり残されたもう一頭はびっくりして立ちすくみ、金縛りにあったようだ。鼻先にシワをよせて、一瞬困ったなあという表情は可愛そうなくらい。厳しい自然の中に生きる野生動物でも、やはり困ったという顔付きはするものだ。

岩尾根やヤブの好きなカモシカも、やはり林道の方が歩きやすいのだろう。幾度かためらいながらも、谷側の茂みの中へ駆け下り消えて行った。あまりにも、夏毛が黒いのでクマかと思った。(63・10)

強風吹き荒れる、山伏岳は30センチの積雪。山梨の地元の人から聞いた面白い話を紹介する。

先年、一頭のニホンシカが捕らえられたときのことである。ニホンシカといっても別に珍しくもなんともない。誰かが口の中を覗いて見て、アット驚いた。なんと、黄金の歯をしたニホンシカだったのである。いつも砂金の混じった土砂をなめていたので金歯になったものと思われる。発見当時は大きな話題となり、現在でも身延町に標本として保存されているという。

山伏岳行きを中止して、私達も砂金探しをやろうやと笑い話となったが、道具がないのでやめにする。糸魚川と富士川を結ぶ線を、フオッサマグナと呼ぶ木州を分断するような大断層が走り、絶えず崩壊を繰り返している。本来は、地中奥深く埋まっているはずの金脈が露出してきたのだろう。(63・11)



登山を始めて以来、アルプスと名の付く所は中央アルプスの木曾駒ヶ岳の他には、私は行ったことがない。関東周辺の山々を除いては、ほとんど東北の山に集中している。

何故、アルプスを敬遠するかと言えば言訳ととられるだろうがシーズン中の山へ到達するまでの行程、山中での混雑等が理由であり、そして、何故か素朴さが感じられないことである。それでは混雑するシーズンを外せばと言われるが、なかなか心が動かないのである。といってもいわゆる食わず嫌いだと自分でも認識しているし、写真で見る景観、お花畑の美しさを見ると一度は行かなければと思っている。

東北の山も欠点も多くあるが、好きなのところはシーズン中でもあまり混雑しない、又は、しているように感じない点である。一部、有名な山は混む場合もあるが、それでもいわゆる観光地といわれる周辺だけで、山へ入ればパーティの数も少なくなってくる。

又、自然林が多く、ブナ等の原生林の中を歩き、山頂付近は低木帯であり、池塘が点在する高層湿原をもつ山々、そして、火山帯のため、非常に荒涼たる地形等、標高の低い割には高山帯の景観が見られる。春から夏にかけての高山植物のお花畑、秋の紅葉の美しさは何にも替えがたい魅力を感じるからである

なお、何とんでも温泉の多いことである。東北の山々は飯豊、朝日連峰のような隆起山地を除き、ほとんどが奥羽山脈を形成する那須火山帯に属し、又日本海側には、鳥海火山脈もあるので温泉にはこと欠かない。未だに火山特有の活動を続けている所が多くあるので、地球はたしかに生きていることに感銘するのである。そして山行後、いで湯で汗を流し、疲れをいやし、すっきりした気分になれるし最高である。

しかし、現今の秘湯ブームであちこちのいで湯が紹介されているので都会の臭いが侵入してきている。以前は、本当に秘湯といえる存在であり、それを思うとマスコミにブームをおこすのは止めてもらいたいと言いたいが、良いいで湯は何びとたりとも楽しむ権利はあるので、これも仕方がない事⁷ある。しかし、この状態も都会の享楽家達は、自然しかないいで湯だから、一時的には喜んで次第に去って行くだろうと思う。こんなブームになっても東北の人達の

人の良さ、素朴さは変わらないのが慰めである。

前にも述べたように良い事づくめではなくなって来ているのも事実である。長いアプローチにマイカーを利用する人達がふえ（多くは土地の人達）バス等の交通機関が極端に減少しているし、中には路線バスが完全に廃止になった所もあるのが現状である。となると、遠方からの登山者はタクシーを利用することになるが、単独、或は小人数で行く場合割高になるという欠点もある。従って計画はして見たが机上のプランでおしまい、という事態になりかねないのである。

秘湯ブームの影響で温泉旅館にも予約なしでは宿泊不可能な状態になるので、土、日曜となると数か月前から予約が必要となり、急にまとまっても山行は無理というのが現状で、どうしても行きたい場合は、ウィークデーにという始末だし、最近、プランをたてるのも億劫になっている。

東北の山もこのように状況は変わりつつあるが、魅力は変わらないし、数ある山の中でもまだ行ってない山、行きそびれた山も多いので計画し、なるべく費用のかからないように同好の士をつのり、実行に移したいと思っている。

出 会 い

若 林 寿 子

昭和62年1月6日新ハイ本部の湘南七福神めぐりに友人5人と参加したその折、声をかけて下さった石原さんの紹介で5人の内、私と相川さん、太田さんの3人が横浜支部に入会させていただき、早2年8ヶ月になります。

あの時、石原さんにめぐり会わなければ、今の様に山に魅せられ毎月何回も山に行くという生活とは違う生き方をしていたと思うと、人との出会いとは不思議なご縁だと思えます。

支部に入ったお陰で今まで無縁と思っていた高い山にも登ることができました。これまで自分のレベルを考えず参加して、皆様にご迷惑をかけてしまったこともあります。その一つ一つが教訓となり、今は自分に適した山との出会いを求めて、これからも楽しく山との付き合いを深めていきたいと思っています。

支部の先輩の方々、そして山を通して知り合った多くの友人に感謝して、未知の人との出会い、遙かなる山との出会いを大切にしていきたいと思えます。

私のアルプス行きは夏山だけの北アルプスである。残雪とお花畑と岩稜を求めて歩く他に抜きんでた高さもいい。設備の整った山小屋もある。楽しい思い出をリュック一杯に詰めて帰り、次の山行計画の夢を展らませる。今年も北アルプス中央部の太郎兵衛平から黒部五郎岳を経て笠岳までの縦走をやり夏が終わった。北アルプスと言えば槍、穂高、白馬と浮かんでくる。私も最初に登ったのはこの山々だった。山に登る時一番気になるのは天候である。穂高では残念ながら雨と霧に視界を阻まれ転がりこんだ山小屋は寿司詰め、これだけの人々が互いに諍り合いながら不平も言わず泊まれたものだと感心した。その後千丈岳の馬の背でも同じような経験をした。それ以来最盛期に行くのは避けている。

白馬連峰は大雪山とお花畑に代表される山だ。長い雪渓が終わると緑濃いハイマツの海に囲まれるようにお花畑が展開する。ニッコウキスゲ、コバイケイソウ、シシウド、そして身をひそめるようにクロユリ、ハクサンフウロといった花々の姿も見る事が出来る。特に蓮華温泉から朝日岳、白山へのコースは高山植物の宝庫と呼ばれている。ミヤマキンボウゲ、ハクサンコザクラ、登山道から少し離れて咲いているコマクサの大群落。時にはスケールの大きさに目を奪われ、可憐さに心が和む。このお花畑も北アルプスの魅力の一つであろう。

槍ヶ岳から見たご来光も忘れられない。槍の肩にある小屋を午前3時頃出る。ここから槍の穂先までは高度180mほど。堅い岩場を鎖や梯子の助けを借りて登る。頂上は狭く満員。鎖場で待つ人も居たほど。やがて東の空が茜色に染まり日の出だ。神々しいと言うのか、雄大と言うのか、しばし息をのみ思わず手を合せてしまう。立山三山でのご来光も素晴らしかった。

この時から北アルプスにとりつかれテレビで薬師岳が放映されると薬師に登り、雲の平から見る黒部五郎の美しさにひかれて黒部五郎に登り、同行の友を得て後立山連峰を朝日岳から針の木平までの縦走を実現した。横浜支部に入ってからには更にその足跡を増やし今日に至っている。そして今年も登ってきた。さて来年はどの山にしようかと夢を展らませている。

数年前、薬師岳から黒部五郎への縦走の途中単独行の70才位の方と少しの間一緒した。コースは殆ど私達と同じだが無理はせず午後2時頃には山小屋に入りゆっくりと山登りを楽しんでいる。家にいて老人扱いされるより自然に触れ大地を一步々踏みしめて楽しむ事がより山の美しさを知る事が

出来ると言われたことが忘れられない。今もお元気でどこかの山を楽しんでおられるだろうか？

私もこの方と同じ年代に近付いてきているからだろうか。最近では山行に温泉を組み入れてみたら……なんて考えている。そして来年また支部の皆さんと一緒に北アルプスに登る事が出来るよう願っている。

日本横断

太田 繁信

山登りの熱が高じてくると様々な病気が出てくる、いわく「三角点病」「百名山病」「朱線病」…といった病気である。私自身もこのいくつかにかかって久しいが、「朱線病」患者の病状は、地図上の朱線（自分の歩いたあと）をつなげることに無上の喜びを感じることにある。

そのためにはバス停の一つや二つ歩くのは全くとわない。そのようにしてやれ「自分の家と丹沢がつながった」といって喜ぶわけである。

私の場合は「朱線病」ではなく「紺線病」であることは前に書いたが、大学時代からこの病にかかっている。この病気の患者が目指すことに日本横断があるが、私も早くからこれを目標にしてきた。自宅から奥秩父までは割と早くつながったが、そこからが時間がかかった。奥秩父から八ヶ岳をつなぐルートは様々なものが考えられるが、できる限り平地の部分を少なくしようとすると、藪尾根をかなり入れる必要があるからである。

なかでも小川山～信州峠の間は藪好きの私も相当苦労させられたものである。また、北アルプスもコマ切れに縦走をしていくため、日本海から槍ヶ岳までつなげるのには10年以上かかってしまった。最後に残った船窪～烏帽子を行ったのが昨年の夏。これで日本横断には北アルプスと松本をつなげるだけとなった訳で、今年の5月、穂高駅から歩き始めた。

穂高駅からは有明神社～有明山～中房温泉を4年前に行っているのだから、この日は安曇野の東に連なる900m前後の山を歩く予定である。長峰山、光城山、芥子望主山などをのんびり歩く。右手には雪をいただく北アルプスの峰が見渡せる気持ちの良いルートだ。最後にここを選んで良かったと思う。松本からの車中、ビールで一人静かに日本横断完成を祝った。

小池 広治

温泉と言えば、会社の社内旅行で行く、箱根や伊豆など大規模な温泉地しか知らない私ですが、支部に加入（昭和61年11月）したお陰で山行の掃りに一浴とか、宿泊地が温泉だったりして、いくつかの趣の変わった所を知る事が、出来ました。以下は体験記です。

秘湯・・・西吾妻を縦走した際、泊まった太平温泉（滝見屋）は、溪流にのぞむ一軒宿で露天風呂は混浴です。お湯か、川か、判らない位、湯量は豊富で、冬は閉鎖している間、狼が湯治に集まってきて温泉天国を、満喫するそうです。〆〆〆

薬湯・・・安達太良を歩いたときの、新野地温泉（相模屋）は、白濁した、硫黄泉で、いかにも身体に効くと云う感じ。検作りの、古びた大きな、内風呂の他に、渓谷を見おろす露天風呂があり、その他にも一つ風呂があった田。大部隊が繰り込んでもビクともしない、ふところの深さです。

銭湯・・・大菩薩登山の基地、塩山温泉（宏地荘）は、町の住人も宿泊客と同様に入浴出来るように、番台が設けてあり、昔なつかしい銭湯の趣を残しています。乾徳山の掃りに、支部長ご推奨の馬肉をサカナに飲んだ、ビールの味は格別でした。〆〆〆

庶湯・・・箱根、宮の下の、太閤湯は、目と鼻の先の富士屋ホテルとは、対照的な庶民湯で、階下の湯量あふれる温泉に浸かって、階上の和室で寝ころんで、箱根の山なみを、眺めていれば、疲れも吹き飛ぶと云う、ものです。

寒湯・・・思親山の掃りに寄った、佐野川温泉（民宿 先祖）は、鉱泉のわかし湯、突然の入湯申込のためか、水同然の風呂で、同行の友人は慌てて飛び出してしまいました。天然の熱い温泉が懐かしかった事。

いつの日か支部の紳士淑女の皆さんと山麓の温泉群をもつ北海道や九州の山行を楽しみたいものと夢見て居ります。

「山との出会い」

北 村 賢

緑に囲まれた、三ツ沢の高台にある母校の校庭からは、冬には白銀に輝く、丹沢連峰が手に取る様に見渡せたが、その当時、丹沢は、「厚冠の山」と、呼ばれ山岳部の部活は認められて居らず、やむを得ず、ワンダーフォーゲル部（山や野原等の自然環境の中を徒歩で旅行するクラブ）に、入部して、一部の仲間たちと、相談し、どうしても丹沢へ行こうと、部活の担任の先生には無断で十一月初旬の土曜の午後、数人で横浜駅に集合！！。 当時は乗客より砂利運び用といった感じの、貨車が2～3台に客車1台連結の神中線（現在の相鉄線）にて本厚木駅迄、そこで小田急線に乗換え大秦野駅へ！ もちろん駅からは徒歩で夕闇迫る頃、ヤビツ山荘着。 翌早朝、快晴！！、表尾根を一路、尊仏（塔ヶ岳）頂上へ、見渡す限りの山なみ。 その上にポッカーリと浮かんでいる富士山、道端には、ひっそりと、咲く名も知らぬ花。 それらが、私が山に「鬼未せられた」大きな一因になったと！！ 今でも思っている。

下山路は、現在では想像もつかない様な、静かな鍋割山頂の草原に寝そべり、澄み切った青空を、心ゆく迄、眺めたあと、後沢乗越～四十八瀬川へと降る、

当時は登山靴等、全く手に入らず、登山には絶対に反対していた親父が、どこからか、旧日本軍の軍靴を探して来てくれ、それを履いて登ったのだが、爪先を痛め、暫くの間、痛い思いをした思い出が残っている。

話は、それだが、登山道も今の様に整備されて居らず、大分苦勞した、山を降りてからも、土埃りの立つ砂利道を、渋沢駅迄、歩いたものである。 翌日の放課後、部活の担任の先生の所へ行き、事後報告；なにしろ登山禁止に、なっている丹沢へ無届けで行ってきたので、停学処分でも受けるのではと内心、ヒヤヒヤしてたのだが！「馬鹿者」！！と一喝された後、それ程までしても、お前たちが丹沢に登りたいなら、今後は自分が一緒に行ってやるからと……！ 学校側の了解を得られたのか、どうか？ 不明だったが時季やコースを変え、何度も連れて行ってもらった、懐かしい思い出がある。

思えば良き「自市」であり、時には良き「友」であった。

その師も、今は亡く、空の彼方より「馬鹿者！！」まだ山が止められんのかと、微笑んで下さって居ることと信じている。

思い出深い、高校生活も終わり、大学へ、そこには正規の「山岳部」もあった。 入部した年度には、上級生のシゴキに会いながらも、山登りは続けられ……

周囲の人からは、山のどこが良いのかと、言われながらも懲りずに歩いて来て、
縁あって、「新ハイキング横浜支部」に入会し、今日に至っている。

山に登る人には、いくつものタイプがあり、例えば、深田久弥氏の百名山を、
目指す人！ 一度登った山には二度と登りたがらない人！ 気に入った山なら
何度でも登る人！ 下界のストレスを解消できる所なら、どこの山でも良い人

山に登ると、いうことに関しては同じだが、目的は種々あり……
決して自分の考えだけが、正しい事だと人に押しつける事は、充分注意すべき事
であります。

山は四季折々、天気、またその時のメンバー等により、登る度に新鮮であり、
同じ山であっても、そのたびに、新しい感動を覚えるものです。

私が登山を、始めた頃は、登山は若者のスポーツであったが、今では中高年の、
世界となり、若者の姿が、減少しているのは、なにか淋しい気がします。
やはり年齢層が高くなると、山に行く大きな理由のなかで、健康の為！
ストレスを発散させる為！等、の比重が多くなると思われるで、……

せっかく山に登ったのに、逆にストレスを背負って、掃って来ることの、
無いように、自他共に自重しあい、「感激感謝」と「頑固」の精神を保って、
何時迄も、歩ける限り……、各人の分に応じて、楽しい山行が、できる様に、
頑張りたいと思います。



危なっかしい山登り

横山 勝利

六十三年八月、昔、登った十勝岳から大雪へもう一度歩いて見たくて、いそいそと羽田を出発、夕方には十勝岳避難小屋へ入った。夕焼を見たり、キタキツネの出迎えもあったり、他の登山者はなく暗くなっても自衛隊の照明弾が富良野の原に上っていた。

翌朝、嫌な風だなど思いながら十勝岳へ、途中より雨が降り始めたが美瑛避難小屋まで何とかいけるだろうと・・・・・・十勝山頂より反対側へ降りようと試みるも飛ばされそうで一歩も動けない。雨、風が予想以上に悪化してしまった。火山灰の吹きさらしの山、戻るに戻れず、一時ではあるが霧がとれて十勝の噴煙が見えてすごい煙だと思った。

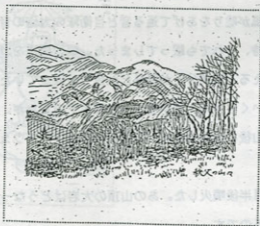
さあ「どうする」山頂は平な所なんてどこにもないしポッターとしている頭がグルグル廻る。岩場で休んでいただけでは体感温度は下るだけ、今までも色々な所でテントを張ったがこの時は最悪だった。張れそうもない斜面に、山頂直下の大岩を壁に火山灰だからベグはきかず下はグズグズの場所にフライも何度か飛ばされそうになったが何とか防ぐ、石を積んでも石自体が軽石みたいで飛ばされてしまう、何回となく補強や点検を繰り返す。大岩側の風がないのが救いだ。夜を迎える。ゴォーゴォーと風が唸りをあげて運る音と自衛隊の大砲の音、今この山頂にいる姿、不思議な気持、それでも眠ってしまった。朝、雨水をコッヘルに水には不自由なし、今考えると硫黄分とか鉄分とか色々が入っていたかも知れない、しっかり食事をしていくらか雨、風が弱まった様で下山したが、時折、風で体が持っていかれた。下山後、旭岳温泉へ、前日と今日はロープウェイは強風の為運行中止だったようだ。

十勝岳はこれから二カ月半後噴火した。あの山頂の大岩はどうなっただろうか今、又ポッターと考えているのです。

山って恐ろしいですね。天候やいろいろな事があるんです。その時どうするかそんな時が一番山を見て考えている。時にはあきらめと自然に身を預ける、結果として何も起きてないだけの話で考えて見れば危ない山登りをしている。

どんな時でも落石、スリップ、増水、雨、雷、その他要因をあげたらきりが無い、でもそれに合わない様に努力したり考えたり、自分自身で自分の身を守る術を一つでも多く持つ事、チームワーク、けして安全な事の保証にはならないが、心に余裕はできると思います。

えらそうな事を言っても、今だ危なかしい山行をしている状態です。けっこうこれが面白いから正直まいつている。



山との出会い

中島 裕

私が生まれたのは、周囲を山に囲まれた群馬県前橋市。しかしその山々は、眺めるだけのものであり、登る対象ではありませんでした。

まして冬には、雪を降とした後の冷たい風を生む、憎むべき存在ですらあったのです。

中学校を出て、私が選んだのは、海上への道。何度かの挫折を経て、遠洋航海を終え、卒業はしたものの、当時は海運不況の真最中でした。

せめて、横浜か神戸に住みたいと、今の会社に入ったところが、私の仕事は、東京での営業でした。

7年程前のある日、当時寮の同室だった人から、西丹沢の山開きがあるけど一緒に行かないかと誘われ、何も知らぬまま、ザックを借りて、検洞丸へ行ったのが、私の山歩きの最初でした。

その後、石原さんをリーダーに、会社の人達と年何回か山行に行き、面白さがわかりかけてきた頃、海ならぬ砂漠の世界へ、2年程とばされ、その後、縁あって、新ハイの仲間に加えていただくことになりました。

私はどちらかというと、同じ山に何回でも行き、その季節あるいは、年毎の違いを感じるのが好きで、一名ワンパターン男（別名もあるようですが）と呼ばれています。これかっらも、好きな花を求めて、皆様と楽しい山行をして行きたいと思っています。



石割山から忍野八海へ

岡野 進

6月に河口湖北側の黒岳へ支部山行で登った時は、雨模様で展望がきかず残念であった。8月のある土曜日、富士山を見たくて山中湖北側の石割山に登り、東海自然歩道を経て忍野八海の単独山行を実行した。

横浜から大垣行きの鈍行夜行列車に乗り沼津迄行きホームで仮眠となった。

沼津駅始発で御殿場駅に6時38分に着いた時は曇り空であった。河口湖行きのバスに乗り山中湖の旭日丘で乗り換えて平野迄行った。このあたりはテニス民宿が多く、あちこちで合宿中の若者達が元気にプレーをしていた。ここから車道を少し歩き分れて林道に入り、川治いに進んで行くと赤い鳥居が見えてきた。

石割神社と書いてあり石段が上へと続いていた。そこで休んでいると男女の2人連れがあいさつをして通り過ぎていった。しばらくして私もあつとを追うように登り始めた。石段が丸太の階段に変わり高度はぐんぐん上がるが、いつまでも続いているので早くも息が苦しくなり足が重くなった。しばらくして先行の2人をやつのことで追い越すと石割神社へ着いた。休息後再び登り始めたが、30名位の老人だけのグループが急な登りで渋滞していたので追い越して進んだ。

登りがゆるやかになり尾根上へ出ると足もかるやかになり、又色とりどりの花が咲き乱れているのが見られるようになった。

それにしても赤や黄色の花々の名前が解ったらもっと楽しいのにと思いながらも心地良かった。目の前が開けた場所に出ると1,413mの本日の最高点の石割山山頂であった。汗をかいた身体に涼しい風が吹き抜けほっとした気分になった。見下ろすと山中湖や旭日丘や家々がうすいベールをかけたようにかすんで見えたが、残念ながら富士山は雲の中であった。ああ、また富士山に振られてしまったやがて途中で追い越してきた人達が続々と山頂に到着してきた。ここからは尾根伝いにアップダウンの繰り返しで平尾山、ここで東海自然歩道と合流して、大平

山、長池山へと徐々に下っていった。大平山山頂近くでバラグライダーを楽しんでいるグループがいて、気持ち良さそうに空を飛んでいる姿を見て自分もやってみたいものかと思いながら、自然破壊につながらないだろうか心配になった。長池山を過ぎて下って行くと突然自然歩道が開発中の別荘地に寸断されてしまっていた。ここからは舗装された道を歩いていったが、忍野村に入って突然大勢の人々が歩き、売店が立ち並んでいる所に出た。忍野八海であった。車の駐車場もあちこちあり、車で見学に来ている人がほとんどであった。ここは歩いてくる所ではないと思った。忍野八海の湧水池は、富士山の伏流水が何年もかかって湧き出たものである。池の水は透明で緑あざやかな藻を育み魚が泳いでいた。今はきれいなこの水がいつまでも汚染されないようにと願って村をあとにした。



偶然に、そうなったのだが……。

その朝、昨夜からの雨もあがっていて、私は電車に飛び乗った。今日は支部山行の日！！ しかも私の好きな大山三峰山！都合が悪くて申し込んでいなかったのだが、急に行ける様になり、連絡もしないま、皆さんのあとを、追ったのである。

煤ヶ谷を九時に歩き始めた。前後に人影はない。林道から右に入ると、急に細い道になり、だんい、うす暗くなり今にも降りそうだ。

しかし先を歩いているであろう、先輩方に追いつきたい一心で、足を速める。夏草が繁り、木の葉が光をささげり時々前後でミシッミシッと、音がする。雨か？ 木々のしずくか？ 髪をぬらし心細くなりかけた時、ぬかるみに数個の靴跡を見つけた。嬉しかった！！ やはり皆さんが登っている。

確信をもって、物見峠又岐点に着いたのが九時五十分、ポツポツと雨が頬に、当たったが、たいした事はない、意を決して頂上を目指す。

柵が道をふさぎ、横木の段々を越え、ガレの箇所を恐る々々進み、鉄の鎖をしっかりとつかみ、すべりそうな板の上を足を踏みしめて行く。

耳を澄ましても人の声は皆無だ。突然！！ くもの巣が顔にかかった。不安がどっと、おそってきた、大勢の人が通った後にくもの巣があるだろうか。しかし……。山行を中止する様な天気ではない。

いやもしかしたら……？でも……？、急に心細くなった私の目にホタルブクロのやさしい色が映った。行くしかない！！ 意を決して登った頂上には人っ子、一人居なかった。まだ十二時少し前、上着を着て髒ずしを頬ばった。大船駅で買った二箱、指てるのはもったいない。

そこへ反対側から一人の、青年が登ってきて、お互い驚いたが、一箱食べて、もらった、その青年は、いちご、を食べ歩いているとの事で、全国の、いちご、について話を下さったが、私には地名と、地図が、結びつかなかった。

十二時半下りにかゝる。

途中、下から上がってきた御夫婦に「一人？本当に一人？」と、念をおされてしまった。よほど、もの好きに見えたらしい、岩たばこが咲いていたよと、教えて下さったがそれらしい岩場でも、とおい、見つけることは出来なかった。こんな時、花の好きなK先輩等は、ほらそこよ！！と指さして下さるだろうと、急に懐かしくなったりもした。あたりは水音だけ？……。

此の世にただ一人という快感も、わいたりして、岩に腰掛け、ゆっくり、水を飲んだ。

広沢寺温泉入り口のバス停に着いたのが二時だった。バスを待つ土地の人達を見た途端、急に今日の単独行が恐くなった、なんと無謀な事をしたのだろうと、後悔の念もわいた。しかしバスの心良い震動の中で「やったぜ！！」と一人にんまりしていた事も、事実である。

あとで聞いたのだが、その日の山行は、行く先を変更して行われたとの事であった。



山に魅せられて

太田 俊子

私が今のように山登りにのめりこむなどと誰が想像しただろう。私自身もおどろいているのだから？主人も子供達も聞いた口がふさがらなると困惑している。

20才の頃、友達5、6人と丹沢尾根に登った。夜行で行き月のスバラシイ夜空と、星が空一面に輝き今にも手がとどきそうだった。その夜景がまぶたにやきついている。山を下って駅でおいしい牛乳を飲んだ。駅も現在のように、にぎやかではなく淋しい、のどかな駅であった。これが私の初めての山らしい山に登った最初の経験である。それから山に登る機会もなく何十年かが過ぎてしまった。

子供も手がはなれた頃友達にさそわれ箱根の明神が岳、明星が岳へ登った。それが又やみつきになり仲間と月に1回か2回、ハイキング程度の山に行くようになった。もともと山にのぼるのが好きだったのかも知れない。

そしてそのハイキングクラブに3年位お世話になり、いろいろな山に登った。女性だけのグループだったので少々不安な面もあった。

その内に今の新ハイを知り仲間に入れてもらい、ますます山が好きになりました。支部の会員の山男、山女も皆良い人達で感謝しております。自分の体力も年齢も考える余裕もなく行きたい山には参加させていただきご迷惑のかけばなしで申しわけないと思っています。横浜支部に入って早2年余りが過ぎようとしている。ふり返ってみるとこの2年間の間に登った山がいくつ位になるのだろうか。各りーダーの後について懸命に歩いた。最初は夢中で、それぞれの特長等わかるはずもなく、でも今は少しはそれぞれの良さや、特長がわかるようになった。自分の登った山や歩いた場所を簡単に記録しておこうと思っている。

友達に良く重いリュックを背負い、苦しい思いをして何故山登りなどするのか

とよく聞かれる、でも私は何と答えてよいかわかりません。あの雄大な自然と、美しい景色、よい仲間、よい家族、そしてなによりも健康に恵まれたからでしょう。これからも一つでも多く美しい雄大な自然にふれたいと思っています。

この先も自分なりに頑張りたいと思います。

追伸

平成元年の8月北アルプス縦走に参加させていただいた。夜行3泊4日の長丁場、全行程歩けるかどうか、初めての経験なので心配で何度もやめようかと思いましたがリーダーに励まされ行く事にした。計画通り全行程を歩いたが、やはり縦走は大変だった。4日間ひたすらに歩いた。天候には恵まれ、今年は雪が多かった為春から秋までの花が数多く咲き乱れそのお花畑の見事さはスバラシの一言につきる。アルプス縦走など夢だけだと思っていただけに本当にうれしく係の方々に感謝いたします。今はよく歩いたと自我自謙いたしております。

ありがとうございました。



みず
飲水の思い出

芹沢 隆仙

山を歩いていて、疲れきった時など、水場に出て、冷たい清水を飲んだ時の安堵感は、忘れ得ぬものである。また、山行計画においても、水場が何処にあるかを、チェックすることは基本的に大切である。

あちこちの山を歩いていると、その山の持つ水の思い出は幾つかある。

私が新ハイの横浜支部へ入会した時の、初めての支部山行が恵那山であった。その時は、Yさんという係の人と2人きりの山行であった。夜行の疲れも出てきて、もういいか減、バテぎみのところに清水が流れていた。頂上に近い地点だったが、そこで一休みとなった。

冷たい水で喉を潤したあと、Yさんはウィスキーを取り出し、その清水で水割を作ってくれた。洋酒は余り好きなほうではないのだが、その時の「水割」は本当に旨かった。

知床の羅臼岳に登った時は、暑い日だった。岩尾別からハイ松の茂る羅臼平に着き、そこから頂上へ半分くらい登ったところに、大岩から垂になった清水が、幾筋もポタポタ落ちていた。周囲はその冷気で涼しく、カップに一垂、一垂ためた水は、体にしみとおった。それはまさに「天の水」であった。

トムラウシ由に登った時は、黒岳の山小屋を出発し、北海岳、白雲岳、高根ヶ原、忠別岳、²後色岳、³尋雲岳と進み、ヒサゴ沼の避難小屋に泊まった。

ガイドブックには、水場として沼にそそぐ小沢があると書いてあったが、結局、涸れていたのか見つからず、沼の一番端まで行って水を汲んだ。手前の方は強風のためか、水が泡だっていたのだ。沼は二つに分かれているのだが、その分けている真中の岸の部分が端のほうでは、細い流れになってつながっているのだった翌朝、沼に沿って歩いている時、残雪の近くにあった、濃いピンク色のエゾコザクラの可憐な姿も忘れられない。

東北の焼石岳の登った時は、避難小屋のすぐ近くに、冷たくて清冽な金明水があった。その澄んだ水の中に、いくつもの白い米粒が落ちていたのを何故かよく憶えている。夏油温泉から、経塚山、天竺峠を越えてきて、ガスの中にしょう酒な小屋を見出した時は本当にホッとした。焼石岳には他に、水量豊富な銀明水があった。ここにもその後、避難小屋が建つたと聞いているので、さぞ快適な一夜を過ごすことができるだろう。

北アルプスでは、槍ヶ岳に登った時。ヒュッテ西岳から登り、東鎌尾根を風雨の激しい中、進んでいる時、暑苦しく、ノドが渇き、どうにもしようがなく、水筒もレインカバーをしたザックの中。そして水場などありそうもない場所で、ちょうど岩の窪みのところに雨水がたまっていた。私はそれを手ですくって飲んだ。それもまた、霧の中に見え隠れする、北鎌尾根と共に強烈な思い出である。

しかし水について決して爽やかな思い出ばかりではない。山を初めて間もない頃、ある会に入っていて、そのメンバーと岳沢から天狗の科尔を経て、奥穂高に登った時だった。

その頃は若かったし、八ヶ岳に登った直後のことで、脚にも自身があったのでつい調子にのって、とにかく暑かったので、いくつもある冷たい流水を飲み過ぎて、ばててしまったのだ。天狗の科尔までの登りはきつく、他のメンバーに大きな迷惑をかけてしまった。灼熱の太陽と苦い（にがい）水の思い出である。

いくら冷たくて旨くても、山行中は節度をもって、飲まなくてはいけないのだ。多くの山はその山の何処かに、独特の水場を持っている。そしてそこには憩いがある。

これからも、旨い水を求めて、山行を続けていこう。



最近、熟年のカップルに、よく出合う。微笑ましい事である。若いカップルと違って、不思議に、顔立ちか、雰囲気か、似ている場合が多い。友達に依ると、そうばかりではない。うちは、出掛ける時は一緒でも、帰りは同じ車輛の、向う端と、こちらの端よ。と云う夫婦もいるが、それでも次には、又一緒に準備をして出掛けている。最近ではテレビでも、定年後の長い人生の過ごし方について、いろいろ議論がされている。

夫婦で同じ趣味は良いことだと云われるが、山中での役割分担が、暗黙のうちに出来上がるのには、年月がかかる。

我が家の場合は、煮炊きは、してくれるが、持って行く食品、調味料の準備は、私の役目で、山の上で「何、卵はないのか、ここで醤油を少々落とせば美味くなる。もみ海苔を散らすのだ。」と云う具合だ。道を尋ねるときには、背中を押して前に出される。

世間は女に甘いからだと言事になっている。

タクシーの相乗りの相手を捜すときも、女の方がよい様だ。

男が前へ出たほうが良いのは、熊にでも出合ったときののだろうか。

まだその様な機会はない。

山行は、すなわち、必要なものを背に負っての旅である以上、非日常的な場面のわけで、何か一寸した、切っ掛けがあると「子供達が小さかった頃はあんな事もあったな」、などと懐かしそうに想い出す。

これも、ウィークデイは、会社から帰って来てから翌朝出勤迄に、風呂、めし、お茶の亭主でも、心にゆとりが出来るためであろうか。風呂の次に「ビール」が抜けていた。又、小回りがきくと云うのか、金曜日の夜の、七時頃の

天気予報を聴いて、目的地を決めることが出来る。

そのためか、良い写真が撮れることもある。

しかしよい事ばかりではない。春の尾根歩きで、夏のような陽差しになり、計算違いで飲み水が足りなくなった事があったが、「おい、水をくれ。」と云う他人なら、この様なことはないと思うのだが。

山男と云えば、小説やドラマの世界では、一つのパターンが出来ているが、実際には色々な人物が居るように、夫婦で山行にもいろいろな型があって良いのであろう。

文字にすればこれだけであるが、ここ迄悟るのには、多少の時間が必要であった。モーゼの言葉に「人を羨むなかれ」と云うのがあったように思ったが、見ていて実に羨ましい夫婦が多い。

まあどんな相棒であっても、早朝に単独行で家を出る時に、キュンとお腹の痛くなるような緊張感はない。

間には、こんな頼り合った、緊張感の薄いのんびり山行もあっても良いのかなと思っている今日この頃である。

定年と山と新ハイの仲間達

御園 培博

前回の「歯染・No27号」（59年11月発行）では「私と丹沢」なる拙文を書いたが、あれから5年、ついに平成2年3月、定年退職することになる。

かつては退職をもって人生の終り、後は、のんびりと余生を過ごすというのが世間一般の考えであった。

しかし、戦後、日本人の寿命が延び、今では世界一の長寿国となり、退職後を「第二の人生」として新たな生き方をする時代となった。私としては「第二の人生」ではなく、やっと自分自身の生き方ができる本当の意味での人生を迎えることができるものと思っている。

この新しい人生の生き方としては、云うまでもなく、山への情熱を最大限に燃焼させること、それも、山を愛し、山に魅せられた新ハイ横浜支部の仲間たちと共に、山を登ることであると思っている。

「山」それは永遠の恋人であり、また、山へ登ることによって、心豊かに生きるための糧をえるということは云うまでもないが、何と云っても、心の通じ合う新ハイの仲間たちと山行を共にすることは、仕事の中での精神的な苦痛や、心にたまるストレス解消のための最良の治療薬であったわけである。それでも下山にかかり、下界が近づくにしたがい、翌日の仕事の事で、つつい気分が重くなることもあった。こうしたことも、「定年」によってなくなり、「山」そのものを楽しめるとすると、今から春3月が待ち遠しい気分である。

「山」よ、「新ハイの仲間たち」よ、どうか、私の新しい人生を大きな愛で迎えてくれることを心からお願いいたします。



今年の夏山 89.7.29~8.16

小倉靖子

大雪山の沢を登った。天人峡温泉の手前から威厳のあるトムラウシ山へ突き上げるクワウンナイ川である。折しも旭岳でSOSの大文字を残して遭難した川の隣であったが、大雪山一の明るいきれいな人気のある沢を登ってきた。

途中一泊キャンプをしなければならないが、1日目は河原歩き、2日目の滝はすべて巻き道、滑は心地よく、すべりにくいコケにワラジも効いて、危険箇所なし。ザイルも使わず、水量さえ多くなければ楽しい山行ができる沢である。この沢は現在一応登山禁止になっているが、13キロにも及ぶ滑が人気で、本当に大雪の大きさを教えてくれる。時期的にも花の最盛期だったりして、入山者が多くキャンプ地の獲得が大変だった。源頭は大お花畑、今夏の異常な暑さで虫に悩まされることもなく、高山植物を飽きるほど見ることができた。ハクサンイチゲ、ミヤマキンバイ、エゾコザクラ、チングルマ、エゾツガザクラその他数々、旭岳へと縦走してなお愛山溪温泉へ足を延ばし、花の稜線5日間のコースだったが、とくにコマクサの群落には目を見張るものがあった。北アルプスの比でないコマクサに歓声の上げどうしであった。SOSのあった谷からの吹き上げる風には熊のおいももあり緊張する場面もあったが、天気にも恵まれ北海道の雄大さを充分味わえる日程でもあったので、満足した夏山を過ごすことができた。どうせ旅費をかけたのだからと北は利尻岳、礼文岳、東は知床の羅臼岳、帰り道にと岩木山、八甲田山、早池峰山と頑張った山行を重ねて帰浜した。海外旅行でもないのに時差ボケの毎日である。大雪山の花、これは是非一度は見るべきであると思う。



随想 休日は近くで 自然浴

香川照夫

今、我国では、労働時間の短縮を進め、勤労者の余暇、自由時間を増やすことに努力しておりますが、増えた余暇時間をどう過ごすかという点は、まだまだ混乱状態だと思います。その要因は色々あるでしょう、例えば休日の自由時間は少なく、皆が同時間帯であって、ラジオの交通情報は、このところ慢性的に週末の交通渋滞を告げています。

時間はできて、その時間を使える受け皿はまだ未成熟と言えます。また、学び、働くことにスペシャリストである人間たちが、突然言われても余暇や自由時間の過ごし方については、アイデアさえ浮かばないと言うことです。数年前から週末に恐怖感をもつ週末症候群という病名もあってと言われております。

そこで人並みのアイデアで過ごそうと思えば、休日は、交通ラッシュ、空港もパンクと、こうした状態が長く続けば、人々はきっと、何をしても疲れるだけ、何もしない方がましと、家にこもったら、動くものである人間が、動かなくなり、自然界へ入らなくなったら、どうなるでしょう、動物でいえば、鋭い運動能力や、野生といわれる感性を失った家畜、すでに本質的な生き物でなくなると思いませんか。

今、ラッシュで動きが取れず、やがて動くことを忘れてしまうかもしれない人間の将来を想像すると、心身共に健康な人間という動物が絶える恐れを感じ、なんとなく暗い将来となりそうです。

私は、長年、山登りを楽しんできました。二十年程前、山登りが、他の競技スポーツ同様に、タイム記録で評価されたとき、何か違うと感じました。

登山は、意志と体力と運動能力と運動機能、知識と経験、技術並びに時には、チームワーク等人間側の問題、その一つ一つのトレーニング強化が、より高く、困難な山頂への登頂記録を創り出してくれる点では、スポーツと同じかも、しかし、そこには、スポーツではない部分が存在すると思う。

それが自然の人間に対する働きかけです。

自然界に目を向け、高さより見物すれば、景色という人間には、創り出せない複雑で、美しい造形を見る、才能ある人は、芸術的創造力を培う事もできる、緑の野にふと、草木の思恵（森林浴等）を受けられ、水辺で憩い（精神的安定）をと。……

無限にある自然の効力は、挙げれば数知れず、これを足で歩くスピードで、吸収することが、精神、肉体両面で健康に寄与するところ大なることは、言うまでもありません。

今後、余暇は国民全体が、家族単位で、仲間単位で、企業単位で、もっと自由

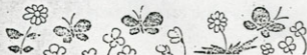
に取れるよう、自由時間の拡大を進めてもらいたい。しかし、国内では多くの人々が都会に住んでいる現在、海が見たくても、山へ行きたくても、自然に触れる前に一仕事、交通戦争がありますので、交通の便についての御検討も、その筋にお願いしたいものです。

『 或る出会いと別れ 』

飯 島 和 子

彼女が、私の勤めている会社に入社して早くも二年九か月の歳月が流れた。誰しも入社という新しい門出には、希望をもってスタートを切る。彼女もそうであった。が、運命なのか、入社して二日目、彼女のご主人が病気の再発という窮地に陥ってしまった。新入社員の身であるうえに、ご主人の入院、看病と、精一パイの努力はしたが、三か月余り、ご主人は命つきて亡くなられてしまった。34才の若さで未亡人となり二人の男の子を育てるという責任がかかってきてしまった。他人が元気付の言葉をかけても、それは単なる言葉であって何の手助けもできない。一刻も早く、悲しみのどん底からはい上がってほしい。ただ祈るだけであった。三か月、四か月と経ち、徐々に明るくなってはきたが、寂しい横顔であった。

彼女が生きて行く目標は子供二人を立派に育てる、そして自分の人生を見つめ悔いのない行き方をする。一年、二年と月日は流れて行った。小さかった子供も自分の意見を主張するように成長した。今年の始め頃、女の行き方として、何か一人よりもすぐれた技術を身につけて、これから先の人生にプラスになるように考えた方がいいのではないかと助言をした。彼女も自分に適した方向を見つけ、経理学校に夜間入学し、三か月勉強をし卒業することができた。彼女と別れるのは、このうえなく淋しいけれど、九月二十日をもって退職し、経理を学んだ事を生かせる職場に転職することになった。私には引き留める術もない。ただこれからは、仕事も一生懸命頑張ってもらいたい、心が豊かになる趣味を持つことを考えて、そして、実行してほしい。風のごとく、サーとあらわれて、サーと去って行く、彼女のこれからの幸せを祈りたい気持ちで一パイである。



やっと富士山に登った

山田 進

なぜ、富士山というタイトルに拘ったかという、そう富士山は3000mあるのです。それも私にとっては最後まで残っていた3000mの山です。平成元年8月13日、無風快晴の中で山頂に足跡を残して来ました。今考えれば随分と長い間、山を登り続けたものだと思う。確か新ハイ横浜支部に入ったのは昭和44年だったかと思うが、

3000mの踏出しは千丈岳、あれは昭和?年9月の初旬に葎崎から入り駒ヶ岳から縦走した時でした。途中5合目の小屋でおやじさんと1時間近く話をして、その日は7合目の小屋泊り。翌日は小仙丈尾根を登って仙丈岳へその時の山頂は、どんなだったか思い出そうとしても頭の中は?? 仙丈小屋では小屋番が居なく私一人、小屋にあった毛布一枚で寝ました。

その日の夜は仙丈周辺は晴れているのに周りの山は、ヒカゴロマ々と賑やかなことで寒くて寝れず、心細いしこの時の事は今でも思い出します。次の日は丹溪新道から河原を歩いて戸台まで随分と長い道程でした。今は車が北沢峠まで入るようになり、簡単に登れる様になりましたが、その後この山には何回か登りましたが、そのなかで印象に残っているのは正月に入山し朝早く小屋を出発して山頂に向かったのですが、樹林帯が終わった所からトレースなし、小仙丈と仙丈の間はナイフリッジを跨ぎながら恐る々々山頂へ。怖かった。暫く休憩していたら何時の間にかトレースができ、帰りは怖い思いをせずに済みました。

その他の山の思いではというと、3月下旬の乗鞍岳を山スキーで山頂へ。登りはヨイヨイ下りは怖い。雪面は凍ってツルツル、スキーをつけて下山。最初に滑った人は途中から転び滑り落ちて行きました。スキーの板はボッキリと折れ足はと思えばなんとラッキー。次の人も途中から滑り落ち今度はスキーの板も折れず足も無事。私は途中から二人の落ちて行くのを見て怪我でもしたら大変と思い、アイゼンに変更。アイゼンに付け変えるといっても立って居るのもやっと、キックターンなんてとんでもない。それでも何とか場所を捜してアイゼンをつけて平らな所まで下りました。その時の私のスキーの板は、今時珍しい木製。おまけにエッジは半分なし、良くも何事もなく下りたものだと思う。他の二人は最新のスキー板でした。

ある年の夏山は、三伏峠から光岳へ縦走。この年は台風崩れの雨雲が太平洋にへばりつき晴れたのは入山した日と下山した日だけ。一週間、雨また雨、土砂降りの中、丁度荒川小屋が潰れた年です。

それでも小屋の中に潜り込んで、やっと雨をしのいで寝ることが出来ました。テントを持っていながら一度もテントの中で寝られなかった山行。赤石岳や荒川岳がどんな山だったか、全く分らず天気の良い時に、もう一度と思っているが今だ実現していません。

槍といえば、この山も何回も登って居ますが思出すのは十月頃、韓国の山岳会の人を案内して槍から穂高を縦走したことです。日本語を少し話す人もいましたが、やはり話が通じない所があり、その時は棒を拾って地面に漢字を書いてウンウン。まあ何とかなるもので英語を話す人もいたが、私の英語では全く通じなかった。先方のメンバーはディスクジョッキーをやる人、社長、自営業、等それぞれ最高責任者なので居ない間は工場が動かせないので従業員はその間特別休暇とか。まあ偉い人ばかりでした。不精者の私は、その後連絡をとらなかったのですが、今でも文通をしていればオリンピックは交通費だけで見に行けたのに。

その他にも色々思い出があります。ここには書けない事も。今思えば20年近くも良く続けたと思う。これからも続けて行く積りですが……。



台風17号 樺島脱出の記

星野 喜美子

お盆休みに久恋の山、塩見岳 間ノ岳 北岳を二泊三日で縦走することができた。その間、一人で留守番の主人に付き合っ……と言えば聞こえはいいが、本当は私自身が行きたかった山、荒川岳 赤石岳を計画し、畑雑ダムからの送迎バスの事など、昨年行ったHさんに問い合わせた所、折返し、同行して下さるとのご返事、これで一安心と嬉しくなる。

台風17号の発生を知ったが、まだ平気と多寡を括り、26日8時のバスで樺島へ入り、帰りの予約をして出発。途中、小下石からの千枚 荒川岳が素晴らしい、清水平で昼食、葎ノ段 駒鳥池を通り急登するとお花畑、その中に新築の立派な千枚小屋が私達を出迎えてくれる。

檢造りの建物は小屋と呼んでは申し訳ない感じ。窓からはお花畑が一望、先日見た北荒川岳の黄 オレンジ、北岳北股の紫を主にしたお花畑も見事だったが、白の多いこも素晴らしい。夕方、ガスの合間に富士山と赤石岳を見ることができた。

この日、改築中の赤石小屋と新築なった千枚小屋の視察に見えた、県の部長さんご一行と東海フオレストの方達と言葉を交わし、その夜宿泊の、紅一点？ だったせいか、「どんな小屋を望むか」「食事は付いた方が良いか」等、感想を聞かれる。

又、転付峠に立って大井川方面を見渡せば、目の届く限りの山は東海フオレストの持山とか、大倉喜八郎翁の山回りのエピソード 伐採した木材を流す鉄砲堰の話など、面白い話から始まって、林業の現状、パルプ 古紙 製紙等、その道の専門家の話には時の経つのを忘れる。

平成6年に大井川源流の、すべての開発工事が終わるので、その時には、二軒小屋の奥の広河原で会いましょう、ということになった。その折、「近年赤石山系の崩壊が激しく、その対策に苦慮している」と言う、所長さんの言葉が現実のこととなって、我が身に及ぶとは思っても見なかった。

翌朝3時過ぎ朝食、だが台風が心配なので出発を見合わせ、4時の台風情報を見る。時速30Kで四国から紀伊半島に上陸、本州を縦断し明日3時東海地方を通過とのこと、昨夜の話にもでた57年の台風で、陸の孤島となった樺島のこ

とを思い、何とか畑雑ダムまで出たいと考え、6時小屋を後にする。

9時榎島着、電話を探したが無い、事務所の電話は貸せないという。バス3台、荷物車1台、先導のジープとで出発したのも東の間、崖上から小石がバラバラ、アッという間にジープがタッチの差で逃げ、後続の車が急停車、その間にガラガラと落石、声も出ない。無線連絡を取りながら安全な場所に移動待機ジープが偵察に走ったが駄目だと引き返してきた、無線に入る声も緊迫度を増してくる、結局先に進めず榎島に引き返すことになった。この間一部の人達が歩くと言いだし、私達も車まで行けば何とかかなると思い、11時バスを降りて歩き始める。

途中何ヶ所もの落石、沢から押し出す土砂と水、これでは車は無理と思いがらひたすら歩く。風も強まり叩きつける雨で顔が痛い、食糧は有ってもこの嵐の中では無理、テルモスのお湯と蜂蜜で一息つく。

靴の中で足がふやけて痛い、2時半やっとダムに到着急いで着替えを済ませ売店で暖かいおそばを戴き、休む間もなく出発。激しい風雨で前も見えない、燃料計の針も心細くなる、落石 倒木 濁流をHさんの腕で強行突破。井川でスタンドを見付けた時は嬉しかった。

通行止の標識は出ていたが対向車もありホッとすると、千枚から一緒に千葉の人を静岡駅で降ろし、渋滞の東名で21時帰宅、翌日は台風一過の晴天だった。

予備日を取らなかつたばかりに連絡もつかず、帰宅を焦って大変な思いをしてしまった。足の指先が腫れて爪も色が変わり、今やっと5本の爪が剥がれ後2本も剥がれそう、足先に力が入らず岩場の登り下りに苦労している。

帰宅後、千枚岳にも登ったという静岡県知事さんに、感想とお願いの手紙をだした所、ナント丁寧なご返事を戴いた。それには美しいお花畑の事、先日、皇太子様とお会いした時、山のお話をなされたことの他、私のお願いにたいして、「喜んでもらえるよう努めてみます」と書かれていた。驚くと同時に嬉しくて何回も読み返していました。

私だったらきっと努力と書くでしょうに、力を抜いて「努めてみましょう」やっぱり私とは違うと感心し、この言葉が好きになってしまった。来年の夏、再び千枚小屋から赤石岳に登ろうと、今から楽しみにしている。



◇時間に挑戦する

昨年の6月、単独で奥秩父の主脈縦走を行なった。時間に挑戦の2日間だったが、稜線を彩るシャクナゲも今では思い出となった。登山ガイドによれば、奥秩父の主脈縦走は4泊5日を要するという。これが私の悩みの種だった。分割縦走も検討したが、そんな悠長なことは言ってもらえない。あるとき書店で「ランニング登山」の本を見た。“山登りに定義はない、山を走って見よう”と著者は勧める。私の場合は時々走るだけで十分。「よし、これで行こう」と思った。

◇まず金峰山へ

6月10日、運動靴に小さなザックという格好で、新宿から中央線の夜行に乗った。韭崎駅からタクシーで瑞牆山荘へ向かう。東の空が次第に白んできた。静まりかえった山荘前から4時30分に出発。白かば林の中を登る。辺りはすっかり明るくなった。眼前に瑞牆山の岩稜が見える。富士見平からは金峰山コースに入る。大日小屋を通過。この付近のシャクナゲは、今が見ごろだ。

急登が続き大日のコル。ここの展望も抜群。更に樹林の中を行くと、五丈岩が見えかくれ、間もなく樹林帯を抜け岩尾根になった。足元にはい松が現われ、稜線付近はアルペンムードに一変する。五丈岩の基部を通り金峰山頂に着く。展望は雄大だ。広がる雲海の上に、南アルプス、富士山が素晴らしい。

巨岩が積重なったような岩稜をくだる。鉄山を巻き朝日岳をこえると、主脈を横断する広い林道に出た。ここが大弛峠なのか。汗を拭い休憩。周囲の展望は開けたが山なみは白いガスの中に浮かぶ。国師岳への登りは、その山容のように仲々ボリュームあるものだった。頂上！と思ったら前国師岳だった。もうひと頑張り、岩のゴロゴロしたような国師岳山頂に着いた。

◇国師岳から甲武信ヶ岳へ

奥秩父の最高峰、北奥千丈岳が目前に見える。昼食していると、ガスがぐんぐん上昇。忽ちなにも見えなくなった。

国師からの下降では長く樹林帯が続き倒木も多く時々踏跡を見失う。こんな孤独な原生林のなかで、樹木に赤い表示を見たときは、本当に神仏に会った思いであった。その後は踏跡を外すこともなく、一つのピークに着く。東あずさだった。道は再び樹林帯に入る。小さな登降を繰返し富士見平、水師と進む。道脇に「千曲川水源地」の表示を見る。いよいよ甲武信ヶ岳をめざす。ガラ場を登りつめ頂上に出る。登山者が1人。14時だった。振り返ると今来たばかりの主脈の連なりが感慨深く望まれる。

甲武信小屋で宿泊手続き。小屋では早速、ビールを飲んでホッとすする。

夕食後は別室でスライドの映写を見る。これは小屋のご主人の労作。この周辺の高山植物、甲武信山頂から撮った、高崎線沿線都市の夜景がきれいだった。翌朝、ご米光は寝床の中で迎えた。茜色に染まってゆく山の夜明は素晴らしい。

◇雁坂峠から将監平へ

朝食後、5時30分に出発。今日の行程は更に長丁場となる。先ず木賊山頂。ここは登山者で賑やか。睡眠は十分、質素な小屋の朝食も結構旨かった。体調も良かった。木賊のくんだりから「走り」も入れピッチを上げる。雁坂峠に着く。広々とした草原、開けた展望を横目に通過。どうも雲行きが怪しい。水晶山を過ぎ雁峠へのくだりになる。この辺も群生しているシャクナゲが満開。1人で鑑賞するのはもったいない。

平原のような雁峠に着く。雨は本降りになった。雨具をつける。雁峠山荘、笠取小屋の前を通過。雨が小降りになった。しばらく単調な道が続くが、ここはピッチの上げどころ。途中に水場があった。ハイキング風の家族連れに会う。雨に濡れたカラマツの新緑が、南面の明るさに映えて美しい。

谷の源頭を丸木橋でわたる。目の回る高さであった。道は右折する。牛王院平というカヤトの原を緩くくたって、待望の将監平に着く。草原の広がる斜面であった。時刻は11時。ここがほぼ中間点なので、縦走の成否の目安が立った。

◇飛竜から雲取山へ

又、登りにかかる。雨は止んだが露を含んだ熊笹で、運動靴の中は水びたしになる。飛竜山に近いハゲ山という岩峰で休憩する。飛竜権現には、ほぼ射程内に入ったこの山行の無事を感謝する。この付近のシャクナゲも見事だ。

狼平を過ぎた。いよいよ大詰め、雲取山を目ざす。雨具を脱いだ。三条だるみからの急登を一気に登る。雲取山頂に着いた。14時50分だった。ついにやった。山頂には人っ子ひとり居ない。周囲はガスに包まれ展望はゼロ。チョコレートを入れた。充実感とは裏腹に、何か空しい感慨だ。ここは2000m以上ある。未だ終ってはいないのだ。

◇終着・鴨沢へくだる

15時に山頂を出発。いよいよ下山である。セツ石山の手前で、石尾根と分かれ一路、鴨沢へと急ぐ。どんよりとした暗い感じの天候だが、道端に咲く花々に眼をひかれる。「とうとう、やった」黙って歩いていても、こらえ切れない嬉しさが、胸の底から湧上る。林道に出た。更に進むと道は左に大きくカーブしている。ここは横断すべきだったのを、道なりに行ったため、最後まで車道あるきをする羽目になった。バス停が見えた。

(終) (88・6・11～12)

私は新ハイ横濱支部に入ってまだ日が浅いので、皆さんにこの文を書くことといえば私の今までの山歴しかない。

私が登山をはじめたのが昭和二十九年夏、学友に丹沢の山に行かないか、とさそわれたのが山への切掛となった。登山というものがどのようなことなのか、私には登山そのものが、どのように登り、どのような準備おしたらよいのかわからないしまつであった、今思うと大変滑稽である。

その夏、友達四人で終電車で丹沢に行った。尾根を登る予定が、途中で知り合ったグループと、水無の本谷を登ることになってしまった。私には沢へ登るなどまったく経験のないことなので、不安と興味とでなんとなく落ち着かない気もちであった。

昭和二十九年ごろは、まだ総ての生活など安定しない時代である。山へ登る前にまず交通の便が大変悪かったこと。また山の装備があまりない時で登山する人もいろいろのスタイルであった。靴は軍隊靴、シラフはアメリカ製放出品、登山ズボン自分で歩きいいように工夫するしかなかった。

どこの山へ登るにしても、駅をおりるとバスが一日に一台しか出ない。バスがない所もあり、トラックに乗せてもらった時もあった。もちろん丹沢も渋沢〜大倉までバスなどない。西丹沢へ行くにも渋沢から雨山峠をこえて行くしかなかった。歩かなければ登れないのである。今のようにタクシーを使用して林道までタクシーで入って二千米三千米の山も手軽に行かれるなんて私たちの山へ行きはじめた時代は夢の夢であった。

話はもとにもどしますが渋沢から歩き水無の林道を歩いて戸沢より水無本谷へと歩いたこと今でも記憶に新しく当時の沢に登った時のスリルと恐怖、ガレ場の登り、そして尾根に出るまでのヤブこぎ、などなにもかも初の経験であった。

この登山後私の山へ行くことがエスカレートして丹沢を初めとして奥多摩、秩父、八ヶ岳、南アルプス、北アルプスなどよく行ったが単独で行く山などは範囲が限られていた。本格てきに登山をやって見ようと思ったのも、このころであった。今まで行かれた山行では自分を満足させる登山が起きなかった。

こんな時ある本屋で冬山の本を見つけた。本を見ると立山、剣の巖冬期の写真であった。冬山がこんなにすばらしいと思った時自分も冬山に行きたいと思ったが、冬山となると冬山へ行く山仲間は少なく、行く山は限られていた。

谷川岳、八ヶ岳、南アルプスなどを単独でよく登ったが一人で行く冬山は思うように行かなかった。

北アルプス、剣、立山などととも一人では装備食料などが重すぎて無理であっ

た、冬山へ行く夢も壁にはばまれて無理だなと思っている時、山仲間にはさそわれて山岳会に入ることになった。私が冬山に行くようになったのもこの時からであろう。この次に書かせてもらう時は厳冬の山でも話しおして行きたいと思いこれで終りにします。

青春っていいなあ～

鎌田善子

『たとへば岩壁の傾斜が五十度であるか、六十度であるかをただ岩の上に立っただけで直感するのが経験の力である。それを測って見るのが科学である。科学の体験を意識にまで高め、直感による判断を下すに至るまでの経験が勉強である。勉強と云うのは、記憶の集成を云うのではないし、努力それ自体を云うのでもない。従って登山の能力は、必ずしも登山の回数とは一致しない。いくら山を登っても能力の発達しない人があり、僅かの回数で、ディスクリミネーションを身につけてしまう人がある。「数多く山へ登ること。」、これが何より大切なことには違いないが、それが勉強になるか、ならぬかは、登山者の心がまえ一つでまゐる。経験を力にまで高めることと経験することとは別である』。およそ三十五年前、ある高校の山岳部で発行していた冊誌の巻頭言にこんなことを書いたことがある。そしてその頃はテライもなく、登山は哲学だと気どっていたものである。しかしその頃の、登山日誌を読むと、まるで天狗の様にコースタイムの早いこと、生意気なことも云ったがやはり若い日々であったとただ懐しく思い出す。子供達も大人になり、結婚して自立してしまっただけで、新らためて夢よもう一度と、そんな気持ちで歩きはじめたが、一つ又一つと山行を重ねるごとに、つくづく思い出すでは、精神力だけでは山は登れないと思い知らされる。しかし今年は思いがけず巻機山、平標、岩手山、北アルプス裏銀座を歩いた。笠ヶ岳の山頂を踏んだ時、このコースは篤志家向だと励まされた。栗駒山も、そして苗場山に越後駒ヶ岳も登った。登山は孤独なスポーツだと云はれるが、一緒に登って下さる人々の協力と励ましで山頂が踏め、途中で落伍しなくて良かったと、安堵する、決して孤独ではないはずである。「若い時に経験があり、中高年になって再開した人ほどご用心。体力と自信の落差が怖い。」と日本山岳会科学研究委員長の徳久球雄さんは云う。昔の夢は昔の夢、今の体力に合った山を楽しみながら足腰をきたえるつもりでゆっくり、いつまでも登りつづけ度いと願っている。

『青春とは、

青春とは、人生のある期間を云うのではなく、

心の様相を云うのだ。

すぐれた創造力、逞しき意志
燃ゆる情熱、怯懦をしりぞける勇猛心、
安易をふりすてる冒険心、
こういう様相を青春と云うのだ。

齢を重ねただけで、人は老いない。
理想を失うときにはじめて老いがくる。
才月は皮膚にしわを寄せるが、
情熱を失う時に精神はしぼむ。
苦もんや孤疑や、不安、恐怖、失望、
こういうものこそあたかも長年月の如く
人を老いさせ、精気ある魂をも芥に掃せしめてしまう。

才は七〇であろうと、十六であろうと、
その胸中に抱き得るものは何か。
いわく「驚異への愛慕心」。
空にきらめく星晨、
その輝きにも似たる事物や思想に対する欽仰、
事に処する剛毅な挑戦、
小児の如く求めて止まぬ探究心、
人生への歓喜と興味。
人は信念とともに若く、疑惑とともに老ゆる。
人は自信とともに若く、恐怖とともに老ゆる。
希望ある限り若く、失望とともに老い朽ちる。

大地より、神より、人より、
「美と喜悦」「勇氣と壮大」「偉力」
との靈感を受ける限り、人の若さは失われない。
これらの靈感が抱え、悲歎の白雪が人の心の奥までも蔽いつくし
皮肉の厚氷がこれを固くとざすに至れば、
この時にこそその人は全く老いて
神の憐れみを乞うるほかはなくなる』
大好きな詩の一編である。

縦走の時とみえはてはや一日空の平は夕晴こころ

うく沢のこころ山居るは後立山そとつ歩のり

野々こ深う水群の足跡と峰に一筋黒部川送か

雨と汗に濡れ一匹の冷え冷えと鳴る山山頂に佇つ

山鳴の言こまごまに魂を来て遮るものい飯盛はい

深う芥の透ける炊方に哀富二の際立ち見ゆる乾徳山頂

御経環る鳥杖父領のいふまじりてふふ等路の口とまじりてふふ踏つ

見送か空の果てなう後穂前をささく見こふ念峰に佇ろて

留次の源流送り登り行く峻つ瀬々音山に響けり

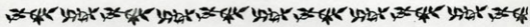
氷氷の陽差り溶けつてさな根の計りたてふ空を踏つてり

もの中へて杖の気配の中にとり終日富士やさな根と行く

朝日共山頂の霧に鎖さへて空しく吾れの家族のつやつ

其々と戸隠建峰をはばらて露にぬれつ山に入りゆく





短歌

山

古谷子

今日一日行き交ふ人のわらざりの空を頼に、吾の家校より

今宵宵ベルセラス流星群と吾々と思つて佇つ茶室の燈

「聖職の碑」の字は薄くも少くも吾々の意気現は此処に顯つ

のうらやかく前山極の光さう、穂高運峰さうやかに立つ

金色の極みにのりて空海に槍の穂を更に染み白く

大槍は天定さうさう、さうさうに吾の眼前に立ちほかりぬ

空へまく梓川沿ひ踏み回れば藤葉松の芽は空へつゝ見ゆ

梓川に―と降りる空と見て雲の行方の兆確かむ

衣冠の眺望望に辰ざりと爰なる常念思ひ残しぬ

いまゆゑに二重にみゆる虹ありて大樺次の天と染みなり

山深き亀甲の池秋精の白き空にほらほらと

赤岳の雄姿真討ひにナマとりのあゝぬく展く碧空のもと

お校の鎖と伝ふきの痛くも光染むる横雲と行く

瀬戸内因島の博覧会と低山に登る。

山本一夫

仕事の出張で瀬戸内には年に数回通うが、先日も7月下旬の一週間を因島から大崎上島で過ごした。そして因島滞在中の日曜日を利用して博覧会の見学と低山に登った。

瀬戸内の暑さは酷しく火の玉の様な太陽がギンギラ、陽に曝した肌がジリジリと焼けるのが分る位アツイ。そして夕方になると有名な瀬戸の夕風で昼間の風はびたりと止まる。夜までの蒸暑さは日中の暑さと違い都会的な暑さを思わせる。

因島は数年前の造船産業不況のため、造船所の倒産、撤退或は規模縮小のため島の看板である「造船の因島」の面影は薄く、本四架橋の国家的大事業のお陰で尾道から向島を経て因島まで橋により陸続きになったとは言え、やはり島へは船で渡るに限る一徹から三原港から高速船で因島の棧橋に立つ。下船した船客3名、棧橋で客待ちタクシー1台、上り便の船を待つ夏休みの子供連れ一家族。まるで離島の感がする。

島の畑は煙草の栽培が目立つ。タクシーの運転手の話によれば、煙草はボロ儲けがないが損もないと言う（最低保証があるらしい）、農作物までも活気がない様だ。それに西瓜がゴロゴロ転がって畑に囲いがある訳でなく盗られる心配がないのかな。いや、盗る人すら居ないのだ。

今年は地方博ブーム。ここ因島でも「89海と島の博覧会・因島会場」が「ポリネシア南太平洋体験村」をテーマに既設のフラワーセンターを中心に開催中であり、地元企業が主催者側から強制に然も大量に買わされたと言う前売券をかう。これで日曜日の午前中の暇つぶしが出来るだろうと、畑の中を小さな丘を一つ越して会場へ。どこにこんな沢山の人が居たんだろうかと思う位に島の人が喜々として入口ゲートに集まって来る。

会場内は熱帯植物を並べた既設の温室を中心に、赤黄青紫の花を配しその色が真夏の太陽に鮮やかに映え眩しい。だがテーマであるポリネシア体験は、同地方の3様式の小屋を建て中に現地人の生活用具が陳列してあるだけのお粗末なもの。野外ステージでは午後から始まるポリネシアのショーを待つ沢山の人が熱い陽射しを少しも気にせずじっと待っている。

これでも博覧会かと思う程貧弱で、まるで子供騙し、大人には耐えられないものであるが、何一つ文句を言わない島の人々が可哀相にさえ思えた。

そして一周するのに一時間も必要がなかったのである。

午後、宿舎の3階の窓から海を見下すと小さな砂浜に子供の群れが一つ海水浴を楽しみ、沖では若者が水上スキーで航跡を描いている。目を海から陸に転じると、山頂に小さな屋根が微かに見える形の良い低山がある。

聞けば白滝山とか。「白滝の山に登れば眼路広し。島あれば海、海あらば島」と歌人の吉井勇が讃嘆した霊山である。

宿舎の管理人は「この暑いのに山登りですか?」と半信半疑。とにかく麦ワラ帽子を借りタオルを持って午前中行った博覧会への道の途中から白滝山へ向かう。峠らしき所までは立派な舗装道路が本四架橋の取付け道路の関連道として完成している。そして見晴らしの良い山腹に駐車場を設け、ここからは樹林の中の薄暗い苔蒸した階段を昇る。信仰の山らしく所々に一部風化した石仏が立つ。

最後に良く整備された石段を昇ると小さな寺があり脇にジュースの自販機がある。汗の手で百円玉を握りジュースのボタンを押した。

ここから稜線を登り山頂へ。そこには大石仏三尊像と石造りの五百羅漢が苔蒸し、また当時の隠れキリシタンの十字架観音も700余体の石仏の中にひっそりと佇んでいる。

石仏群の隅に立つ展望台に上がる。北に尾道市街、銀色に輝く因島大橋。西に生口島、大三島が大小の島々を従え、南に石鎚山をはじめとする四国山脈。東には鏡のような瀬戸の海に浮かぶ小船の群れ……まるで箱庭の中心に立つ様だ。歌人吉井勇が感嘆した気持ちがわかる。勿論このバカ暑い中を山に昇る物好きは他に誰も居ない。この景観は俺の一人占め!

山腹の駐車場まで一気に駆け下りる。舗装道路に出たら全身から汗が吹き出る。道端のミカン畑からまだキンカン粒の青いミカンをもぎとり、かじりついて酸っぱい汁で喉に活を入れる。

宿舎に帰りシャワーを浴びて、この世にビールを初めて作った人に心から感謝した。それにしても本当に暑かった島の日曜日であった。



ある一期一会

— 初めての山でのこと —

熊谷 松治

もう37年も前の話である。福島県浜通りの定時制高校に通っている頃、同僚数人で、勤め先の短い夏休みを利用して、2泊3日の裏磐梯～磐梯山へのハイキングに出かけた。

それまで、山らしい山へ登ったことのない連中なので、同級の登山経験のあるYくんは、いろいろアドバイスを受けて、5万分の1の地図も借りて出かけた。

第1日は松原湖畔のバンガローに泊まり、翌日は、快晴に恵まれ、爆裂火口の方から頂上を目差した。何しろ、初めての山登りで、装備などあろう筈がない。買い出しに使ったリュックに、米軍放出の毛布を詰め、米、飯ごう、食料品等を入れて出かけた。肝腎の水筒は誰も持っていなかった。

散々汗をかいて登った。頂上直下の弘法清水のうまかったことは、今でも忘れられない。

下山は翁島方面の予定だったが、どこで間違えたのか、猪苗代湖方面へのコースに入っていた。

2日目の夜は猪苗代湖の天神浜キャンプ場で、貸テントに泊まる予定だったのでどちらでもよかったわけであるが、……。

下山は、登頂した後の満足感と、眼下に広がる猪苗代湖を眺めながら下るばかりなので、途中、何度となく休みながら降りていった。

どのあたりからか、父親に連れられた、中学生を頭に3人の娘達と、追いつ、抜かれつ下山となった。途中で一緒に休んだりして、どちらからともなく、言葉を交わすようになり、この父娘達は、地元会津の人達で、毎年夏休みになると一度は磐梯山に登るとのこと。写真を撮って上げたりして、猪苗代の町に入ったあたりで別れた。

その後、山での写真を送ると、父親から丁寧なお礼の返事が届いた。又、新年には、父親からも、娘さんからも年賀状をいただいた。そして数年、年賀状だけの交歓が続いたが、私も結婚して世帯をもち、どちらからともなく音信が絶えてしまった。

遠い青春の日の一駒である。

(完)

— あとがき —

「しだ」28号発行の話は支部創立30周年の際にもでしたが、実現しませんでした。

今年、平成元年を記念して是非発行したいという支部長はじめ皆さんの強い要望で、支部ニュース6月号で、原稿募集の要項をお知らせしました。

早い方は6月末には原稿を送ってきましたが、8月末の締切までに15名しか集まらず、締切りを1ヶ月延長して、やっと25名の寄稿を頂きました。

その間、紅葉坂のユースホステル会議室で、4回の編集委員会をもち、今回は、ワープロで製版して、ゼロックスで印刷するという方法が決まり、ワープロの作業は、6名の方に分担してもらいました。

従って、それぞれ機種の違いを使っていますので、頁によって字体、大きさ、配列の方法等、不揃いの点もあると思いますが、以上のような共同作業ということで、大目に見ていただきたいと思います。

又、表紙だけは特殊な紙を使いますので、ゼロックスでの複写ができないので、謄写版印刷ということで、私が担当しました。

印刷器のスクリーン（絹の網）や、無地原紙等を買いに神田まで行きましたが、謄写版の機材はすでに製造をやめてしまって、入荷せず、インク等も在庫があるだけだと言っていました。

そういうわけで、「しだ」の表紙も謄写印刷としては最後のものになるかも知れないと思うと、いささか感慨なきにしもあらず……です。

このあと帖合せ（頁を揃える）、印刷、製本の工程が残っています。年末に向って皆さんの多忙な時期に、もう2回程、委員及び有志が集ってそれらの作業をして、はじめて完成です。本が支部会員のお手元に届くのは、順調にいった平成2年1月例会は、ちょっと無理なような気がします。

原稿を寄せて下さった方、ワープロを打って製版をされた方、度々の編集委員会に出席して貴重な意見を述べられた方、最後の製本作業に協力された方、皆さんの合作の「しだ」28号です。

何も出来ないくせに、名前だけの編集長を助けて下さった皆さん、本当にご苦勞様でした。末筆ながら厚く御礼を申し上げます。

どうぞ、じっくりご覧になって、ご感想、ご批評をどしどしお寄せ下さるようお願い致します。4回目の編集委員会を終って――。

平成元年11月22日（熊谷）

「しだ」の由来

横浜支部報「しだ」の由来は、当支部設立者の一人、
浜野 栄治氏によって命名された。

これは「しだ」の研究者“沼方 東行氏、を友人に
持つ浜野氏も、しだの愛好者で、山旅の度に「しだ」を
集めていた。これにあやかって「しだ」とした。

編集委員 北村 賢 石原 弘之 熊谷 松治
御園 塔博 山田 進 山本 一夫
中島 裕 茂木 武 星野 喜美子
森田 善子 長谷川 美江 (順不同)

ワープロ製版 北村 賢 御園 塔博 山本 一夫
中島 裕 茂木 武 星野 喜美子
(順不同)

表紙製版 熊谷 松治

製本 横浜支部会員有志一同



— 平成 元年 記念 —

羊 歯 (SHIDA) 第 28 号

平成 元年 (1989) 12 月 25 日 発行

発行者 新ハイキングクラブ 横浜支部

支部長 北村 賢

編集人代表 熊谷 松治

発行所 〒222 横浜市港北区師岡町 344

北村方 (TEL 045-531-0448)

SHC 横浜支部

